

この春、私はある男女の結婚の儀を御奉仕する運びとなつてゐる。希望や夢に満ち溢れた初々しく瑞々しい二人の門出を心より祝福する。しかし、些か不粹ではあるが、天の邪鬼な筆者のこと、この場を借りて一足早い祝辞ならぬ訓辞を述べさせていたたくこととしよう。



出雲平野では社家のことを代官家と呼び慣はしてきた。近世以降のことであらうか、その多くは代官家同士で婚姻関係を結んできた。傍目にみれば、神主としての社会的地位を安定的に維持せんがための慣例と見られよう。また、社家同士の政略結婚として、自らの地位と名譽の保証・保身を図るためと映るかも知れない。ただし、そこにもう一つの重要な社会的、文化的機能があったことを忘れてはならない。それは、神主としての礼儀と矜持、神祭りに臨む

錦田 剛志

心の姿勢、祭祀の機微などを感覚的に共有するもの同士が家職を嗣ぎ、神仕への道を円滑かつ堅固に次世代へと継承する文化装置とでもいふべき機能である。すなはち、幼い頃から感覚的に養はれた「神

道のいろは」を悉無く後世に継承、発展させることができたらうといふ期待に裏付けられた営みともいへよう。さて、この春結ばれる若き二人。何を隠さう新郎は代官家の長男で禰宜、新婦は代官家とはこれまで縁なき者である。筆者と全く境遇が同じである。考へてみれば、今日は親との同居さへ嫌悪される「家なき時代である。」「家」の否定こそ、悪しき封建社会の残骸から個人を解放し、真の民主主義的な社会を形成するとも教へ込まれた我が世代である。わざわざ親との同居が前提の家庭へ、まして一生涯神祭りを職とする代官家へ（しかも兼業神主）嫁ぐ奇特な女性はさうあるまい。その御縁に新郎はまじもって感謝しなければならぬまい。



「おんや」に嫁ぐ貴女へ

まあ、新郎はどつても良い。さらに神明奉仕に励み、御神酒は程々に氏子を大切に歩めば良い。新婦はまさしく未知の世界へと足を踏み入れる。「代官家の守り」として、妻として、母として、女として歩んで行かねばならない。「お宮は奥さんでもちよるわ」とは出雲平野でよく耳にする言葉である。神明奉仕に専心し、祭りが済めば氏子たちと浴びるほど御神酒をいただいてあつく語る男たち、その間、諸々に細やかな心配りをしつつ御神酒を授け、肴を調へる代官家の女たち、田舎の祭りの風景は今もそんなに変わっていない。酔ふほどに神懸かりする田舎神主と氏子を導き、まさしく祭りと氏子を志で支へてゐるのはこの「代官家の守り」、女達ではなからうか。

にじきた つよし 鳥根立虫神社万九千社福直



新婦よ、代官家から嫁がうが嫁ぐまいがそのやうなことはどつてもよい。要は、如何にして神仕へする家の責任と矜持を身以て感得するかが大切である。それは貴女の日

本人としての感受性、感性に委ねられてゐる。そして貴女を思ひやる夫と家族の真心にかかつてゐる。男女共同参画社会の実現はいふまでもなく大事である。正当な理由なく男女の性別により職業選択の自由が妨げられるべきではない。しかし、貴女が望んで田舎神主の妻としての道を選び定めたらうへは、良き「代官家の守り」として生涯神仕への道を全うしていただきたい。幾多の試練もあるだらう。しかし、君に覚えておいて欲しいことがある。それは、「神祭りに臨む人々は皆、真心の持ち主である。いや、さうでありたいと願ふ人々である」。これは、常々我が恐妻へ感謝をこめて伝へたい、人を信じるための言葉でもある。どうか未永くお幸せに、素晴らしい人生を。蛇足ながら筆者は妻がさうであるやうに、女性神職は神祭りの本来あるべき姿の一つと考へてゐる。女性が「代官家の守り」に留まることなく積極的に神主の道を歩むことを期待する者である。